

## シンポジウム

## 5. 高気圧酸素治療の診療連携—大都市型施設において

小林繁夫 高橋英世 西山博司  
末永庸子 鷲尾晃代 片山貴晴  
土屋秀子 榊原欣作

(名古屋大学医学部附属病院高気圧治療部)

1968年、名古屋大学医学部附属病院に第2種高気圧治療装置が設置された当時、目標とされたのは、この施設を専門のスタッフを擁した HBO のセンター的な施設として発展させることであった。その後の歩みを見ると、この基本理念は、単に院内の HBO を処理するだけでなく、中部地区全体の HBO の中心的役割を果たすというかたちで実現されつつあり、これまでの歩みを概説する。

近年、HBO に関する情報や知識が医療従事者の間に浸透し、多くの医療機関に高気圧治療装置が導入されるようになった結果、地域の住民にとっては容易に HBO の恩恵を受けられるようになったが、その反面、それらの医療機関の間に連携がなく、互いの間に情報交換の機会がないことがひとつの問題となりつつある。そこで当施設では、一般の医療機関から HBO の適応に関する照会があった場合は、地域内における最寄りの HBO 施設を紹介したり、また第2種装置による管理を必要とする重症例を受け入れた第1種装置保有施設に対しては、適当な医療機関へ転送するための情報提供などを行ってきた。このことは、当施設を核とする一種のサテライト体制とも言えるが、相互間の関係は全く対等であって、何等の強制や義務を伴うことはない。

第三次救急への対応も当施設に課せられた重要な役割であるが、当院の病床事情が隘路となり、必ずしも効率的に対処していない。病院全体の診療体制整備の中で解決されるべき問題である。

当治療部独自の業務として、高気圧治療装置の導入が予定されている医療機関に対し、医師、技術職員の教育と訓練、文献や資料の提供などを行っているが、この面に関しては活動が定着し、HBO の安全確保に十分な成果を挙げている。

## シンポジウム

## 6. 高気圧酸素療法診療連携—地方型施設において

山本五十年 澤田祐介 永松 香  
有嶋拓郎 上山昌史

(鹿児島大学医学部附属病院救急部)

【地域からの要請と役割】従来、鹿児島県における高気圧酸素療法(OHP)は無に等しく、減圧症患者は福岡県か沖縄県にヘリコプターにて搬送せざるを得なかった。ガス壊疽患者の場合にも外科的処置に頼らざるを得ない状況が長く続いた。1987年5月に当院に大型2種の高気圧治療タンクが設置されたのは、この地域からの強い要請に基くものである。当施設は救急部に併設されており、特殊救急疾患に対する特殊専門施設としての役割が期待されている。更に非救急的疾患に対する認識も高まり過去3年間に25医療施設、院内15診療科に活用され、延べ施行件数は2516件である。

【OHP 運営の現況と問題点】当施設は、①院内診療科に対しては中央利用施設として運営され、院外施設からの救急疾患患者には独自の診療施設として治療に責任を持って当っている。②OHP 部門に定員がいないため、コンサルト・受付窓口業務・OHP 操作ともに救急部医師が『ボランティア』として当っている。③患者責任は当該診療部門に、操作責任は救急部にあるとし、当該医師の付添を義務づけている。従って、問題点として、①技師の欠如、当該診療部門の付添医師の都合により OHP 稼働性が不充分である、②救急対応病床が少ないため地域の要請に充分に応えられない、③独自の医師定員がないため OHP の運用が『片手間』に陥りがちであることが指摘できる。

【今後への展望—可能性を求めて】①24時間稼働可能なスタッフの充実、②独自診療の充実、③診療科との協力関係の強化が必要であり、更に、④医療関係者・市民への働きかけを通じた地域のニーズの掘り起こしと離島等の遠距離搬送を含めた地域医療システムの発展が不可欠である。地域医療発展の一環として、OHP 部門を地域に開かれた治療部・診療科として確立するべきである。